



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 42 号

(2013 年 1 月 15 日)

発行所： 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-19-1

九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座

山口裕幸研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人： 山口裕幸, 編集担当： 坂田桐子

《 目 次 》

§ 第 59 回大会 (於 京都大学) のご報告……………1

★ 第 59 回大会後記： 永田素彦

§ 本年度『優秀論文賞』決定……………3

★ 選考過程と結果の報告： 沼崎 誠

★ 受賞者の声： 縄田健悟／橋本 剛

§ 第 5 回『優秀学会発表賞』決定……………5

★ 選考経過と結果の報告： 結城雅樹

★ 受賞者の声： 白岩祐子／柳澤邦明／竹村幸祐／橋本剛明

§ グルダイ学会大会体験記……………9

平川 真

§ 東日本大震災に関する会員の報告……………10

★ ビッグデータから見た東日本大震災： 三浦麻子

§ 事務局からのお知らせとお願い……………12

研究の国際化支援制度 (英文論文校閲補助) について／実験社会心理学研究掲載予定論文／
実験社会心理学研究の特集テーマ募集

§ 広報担当からのお知らせ／グルダイ学会関係連絡先 ……14

★★ 第 59 回大会のご報告 ★★

第 59 回大会後記

大会委員長 永田素彦 (京都大学)

大会期間中は、受付などで、こちらの対応や段取りの至らなさから、ご不便をおかけしたり、不愉快な思いをされた方もいらっしゃるかと存じます。どうかご寛恕いただけますと幸いです。

末筆ながら、大会委員会を代表して、大会にご参加、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。今後も、学会内部の多様性、隣接領域や現場の専門家とのコラボレーションを活かして、グルダイ学会がますます発展することを願っています。

★★ 本年度『優秀論文賞』決定 ★★

優秀論文賞の選考経過と結果の報告

機関誌編集担当常任理事 沼崎 誠（首都大学東京）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第51巻1号及び2号に掲載された原著論文7本、資料論文5本の計12編でした。6月18日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文3編を選び、1位から3位まで順位をつけて、9月7日を締め切りとして投票をお願いしました。

20名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1位票に3点、2位票に2点、3位票に1点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、9月21日に優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の2論文に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

縄田健悟・山口裕幸（著）

「個人間の危害行動が集団間紛争へと拡大するとき：一時集団における集団間代理報復の萌芽的生起」
（第51巻1号 pp. 52-63.）

橋本剛・吉田琢哉・矢崎裕美子・森泉哲・高井次郎・John G. Oetzel（著）

「対人ストレスの日米比較：親密性とソーシャルスキルの観点から」
（第51巻2号 pp. 91-103.）

なお、大会の総会において、この結果を報告し、授賞式を行いました。受賞者の先生方の、益々のご研究のご発展をお祈り申し上げます。

受賞者の声

◇縄田健吾（九州大学）

このたびは、優秀論文賞という栄誉ある賞をいただき、誠に光栄に存じます。本論文をご選考いただきました審査員の先生方、及びご査読いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

大会当日の懇親会では、受賞者スピーチがあることを事前に伺ってはいたのですが、すっかり忘れて食事とお酒を楽しんでおりました。そのため、スピーチ内容もろくに準備せず、しかもお酒も入り、論文題目もうろ覚えの状態でのスピーチとなってしまいました。改めてお



酒の入っていない状態で、喜びの声を執筆させていただきます。

本受賞論文で検討した集団間代理報復とは、一方の集団の成員が他方の集団の成員へと危害を加えたときに、それを知った被害者と同集団の成員が、加害者と同集団の成員に対して報復を行うという現象です。本論文では、実験室場面における初対面どうしから形成される一時集団においても、集団間代理報復が生起するかどうかを検討いたしました。詳細は本文をご覧くださいのですが、初対面からなる一時集団であっても、集団間代理報復の萌芽的形態が見られるという結果が示されました (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/51/1/51_1_52/article-char/ja/)。

この研究は、集団間代理報復に関して、私が最初に行った実験です。また、この論文は、私が初めて学会誌に投稿した論文でもあります。つまり、私の大学院時代の研究の方向性を決めた第一歩目の研究でした。

この初めての投稿論文は、決してすんなりと通った論文ではありませんでした。初稿の審査結果では、審査の先生から極めて重要なお指摘をいただきました。このご指摘に回答するためには、どうしても再実験が必要でした。再実験には労力も時間もかかるので、一度は取り下げることも考えました。しかし、共著者の指導教員である山口裕幸先生とも相談し、この論文の結論の妥当性を明確に示すために、再実験を行うことにしました。この再実験部分を、「実験2」として追加した上で、改めて審査をしていただき、なんとか無事採択されることとなりました。

初めて論文の審査プロセスを経験した私には、この論文は厳しい審査をなんとか乗り越えた“難産”の論文でした。しかし、今振り返ると、結果として論文は採択していただき、さらにこのように優秀論文賞という形で身に余るほどの評価をいただきました。悩みながらも逃げずに、手間と時間をかけて再実験を行ってよかったと心から嬉しく思っております。

最近、博士号も取ってしまったこともあり、少し幅を広げた研究領域に着手している一方で、自分はやはり“代理報復”の研究者だという思いも強く持っています。この受賞を励みに、若輩ながらもう一度初心に戻り、集団間代理報復研究を進めて参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。

◇橋本 剛（静岡大学）

橋本 剛（静岡大学）・吉田琢哉（東海学院大学）・矢崎裕美子（日本福祉大学）・森泉哲（南山大学）・高井次郎（名古屋大学）・John G Oetzel（ワイカト大学） 執筆：橋本 剛

このたびは歴史ある学会の栄えある賞を賜り、大変嬉しく思うとともに恐縮しております。投稿論文の審査において建設的なコメントを下さった査読者の先生方、長い論文にお目通し下さった審査員の先生方、そして調査の実施にご協力下さった日米の調査参加者・調査協力者に、著者一同を代表してお礼申し上げます。

人間にとって、他者との良好な対人関係を構築・維持することが極めて重



要な課題であることは、社会心理学においても今日に至るまで、さまざまな形で指摘・議論されています。そのことを考えると、人間にとっての最大の悩みが人間関係のトラブルであることは、古今東西、普遍的であるように思われます。しかしながら、人間の社会性を考えるとき、進化を通じて培われた普遍的傾向のみならず、文化的環境によって構築される多様性や独自性といった側面も無視できません。すなわち、対人関係の悩みやトラブル（対人ストレス）に煩わされないような、円滑で良好な対人関係を築きたいというのは人間にとっての普遍的な望みですが、そこで適応すべき対人関係がどのような性質を有しており、そこに適応するためにどのような対人方略が有効なのかについては、文化によるバリエーションがあるのではないかと考えられます。

それでは、現代日本社会における対人ストレスにはどのような文化的特徴があるのでしょうか。直感的には、集団の和や協調を重視するという美德の陰に見え隠れする「事なかれ主義」があり、それが過剰な自己卑下、建て前と本音の使い分け、「空気を読む」ことへのプレッシャーなどに繋がっているように思われます。そして、それらの特徴が、生起する対人ストレスの種類や頻度、インパクトなどを左右することは十分に考えられるでしょう。たとえば、事なかれ主義と場の空気を読もうとする心理の組み合わせが、いじめに対する傍観行動を促進して事態を深刻化させるであろうことは、想像に難くありません。また、日本における（対人）ストレス対策は、カウンセリングなど、問題に直面している個人に焦点化したものに留まりがちですが、その背景にも、なるべく事を荒立てないことへの志向性や、悩んでいる人も自己卑下的に自身の非を認めやすいという文化的傾向の影響があるのかもしれない。しかし、対人ストレスのあり方が実は社会文化的環境によって少なからず規定されているにもかかわらず、過剰な心理主義によって「結局は本人の問題」という基本的帰属錯誤が促進されてしまうことは、問題の根本的な解決をますます難しくすることにもなりかねません。その意味で、現代日本における社会文化的特徴が、どのように対人ストレスと関連しているのかを明らかにすることは、非常に重要な課題ではないかと思われます。

しかし、日本人を対象とした研究だけで、日本社会にそのような独自性があることを実証的にあぶり出すこともまた困難です。そこで、安直ではありますが、さまざまな点において日本との文化的な差異が指摘されているアメリカを対照群とすることによって、日本社会における対人ストレスの独自性を明らかにできないか、という意図に基づいて、本研究は企画されました。とはいえ、著者だけでそのような研究を実施することはとうてい不可能でしたが、幸いにも異文化コミュニケーション研究に造詣の深い高井次郎先生を中心として、心強い研究チームを結成することができました。当初の問題意識に比して得られた知見はささやかであり、至らぬ点も多く今後の課題も山積しておりますが、今回の受賞を今後の展開への期待として受け止め、さらに研究に邁進していきたいと思えます。最後に、種々の困難を乗り越え、このような成果に至るまで多大なサポートを提供して下さった研究チームのメンバーに、改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

★★ 第5回『優秀学会発表賞』決定 ★★

優秀学会発表賞の選考経過と選考結果のご報告

選考委員長 結城雅樹（北海道大学）

2012年9月22日から23日にかけて京都大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第59回大会において、「2012年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は、規定により「第1著

者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後（退学後）5年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた学会賞です。

以下に、今回の選考経過の概略ならびに選考結果をご報告いたします。

1. エントリーの受付

エントリー受付は、大会発表申し込みの際になされました。エントリー総数は41件でした。この中に、規定上、第1著者に受賞資格がないものが1件含まれていたため審査対象から除外しました。その結果、第1次審査の対象となった発表総数は40件でした。

2. 第1次審査

第1次審査は、常任理事及び理事により構成された20名の選考委員により行われました。各選考委員は、8月上旬から下旬にかけて、エントリーされた発表の論文集原稿を読み、各部門において授賞に相応しいと思われる発表3本以内（「該当なし」も含む）を選び、投票しました。（本年度は、English Session部門のエントリー者が3名であったため、当該部門では事前投票を行わず、すべての発表を当日審査の対象といたしました。）

集計の結果、ショート・スピーチ、ロング・スピーチ、およびポスター部門のそれぞれにおける上位得票3件ずつ、およびEnglish Sessionの全エントリーを併せた計12件が、当日の第2次審査に進みました。

3. 第2次審査

第2次審査は、第1次審査を通過した12件に対して、大会期間中に行われました。1つの発表に対して3人の選考委員が、「発表内容」と「プレゼンテーション」のそれぞれを5段階で評価しました。

4. 授賞対象発表の決定

最終集計は、第1次審査と第2次審査の結果を合わせて行いました。その結果、部門ごとに最高点を獲得した以下の発表における第1著者の方々に授与されることが決定しました（敬称略）。

<ロング・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：白岩祐子（東京大学）
- ・ 発表題目：犯罪被害者の発言による量刑判断上の被影響認知プロセス
- ・ 共同発表者：谷辺哲史・唐沢かおり

<ショート・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：柳澤邦昭（日本学術振興会・京都大学）
- ・ 発表題目：死の顕現化に伴う脳内処理過程と文化的世界観防衛の関連
- ・ 共同発表者：嘉志摩江身子・守谷大樹・増井啓太・古谷嘉一郎・野村理朗・吉田弘司・浦光博

<English Session 部門>

- ・ 第一発表者：竹村幸祐（京都大学）
- ・ 発表題目：When do North Americans become collectivistic? A cross-cultural study on the effect of intergroup competition on ingroup cooperation

<ポスター発表部門>

- ・ 第一発表者：橋本剛明（東京大学）
- ・ 発表題目：なぜ集団による謝罪は「許し」をもたらさないのか
ー不祥事企業に対する影響力の要因の検討ー

受賞者は、学会長より賞状を授与されました。また、受賞した発表に関する論文を第1著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を付与されました。すなわち、「特集論文」に準じて、主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン(JGDA_Flash)」における受賞発表日（2012年11月1日）から1年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、その旨を明記の上、2013年11月1日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

受賞者の声

◇ロング・スピーチ部門

白岩 祐子（東京大学大学院人文社会系研究科）

この度は、このように名誉ある賞をいただき大変嬉しく存じております。本発表を評価していただきました審査員の先生方に感謝申し上げます。

本発表は、近年日本の刑事裁判で始まった「裁判員制度」と「被害者参加制度」に着目し、これらの制度が適用される裁判場面にて、個人がもつ「理性的であるべき」という規範的な裁判イメージの効果を検討したものでした。先行研究では、「市民は犯罪被害者に同情して重い量刑を選択する」という予測が主として検証されてきましたが、個人は自己を理想とする姿に近づけようとする主体的な存在でもあります。とりわけ、正解が存在しない裁判という状況では、個人のもつ規範的な裁判イメージに沿って意思決定される側面があると考え、先行研究での予測とは逆に、軽い量刑が選択される過程を明らかにしようとした点が、本発表のポイントになります。今後はこのイメージの直接的な効果を詳しく検討していく予定ですが、本受賞は、今後の研究活動における大きな励みとなりました。

今回の発表は、共同研究者の谷辺哲史君と、研究をご指導くださった唐沢かおり先生のおかげで実施することができました。また、いつも議論に付き合ってくれる橋本剛明君、渡辺匠君など研究室の同僚にも感謝しています。最後になりますが、発表の場において貴重なご指摘をくださいました先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。



◇ショート・スピーチ部門

柳澤邦昭（日本学術振興会・京都大学）

この度は優秀学会発表賞という名誉ある賞を頂戴し、大変うれしく思います。ご選考いただきました審査員の先生方、また本発表に対してご質問及びご指導いただきました諸先生方に感謝申し上げます。本発表では、死の顕現化によって生じる文化的世界観防衛の高まり、これを調整する神経プロセスに焦点を当て、実施した研究成果を報告させていただきました。社会心理学の領域では、これまで存在脅威管理理論に基づいた膨大な研究成果（例えば、死の顕現化に伴う防衛反応など）が報告されています。しかし、存在脅威管理理論に基づいた神経イメージング研究は、比較的最近報告されたばかりであるため（私が知る限り 2010 年以降）、死の恐怖に関連する神経ネットワーク、また、そのような神経ネットワークが後に生じる防衛反応へと波及していくプロセスの検討については着手されていません。本研究はこの波及プロセスをほんのちよっぴり捉えることには成功しましたが、まだまだ満足いく成果を挙げられておりません。この受賞を励みとし、より一層研究活動に邁進していく所存でございます。



◇English Session

竹村幸祐（京都大学）

この度は栄誉ある賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。審査員の先生方、また貴重なコメントをくださいました先生方に、心より感謝申し上げます。

本発表は「北米人の集団主義」をテーマとしていました。比較文化研究が発展する中で、「個人主義社会」の代表と目される北米でも実は強い集団主義が見られることが明らかにされてきました。北米における集団主義は東アジアにおける集団主義とどのように違うのか。本発表では、こうした問いに答えるべく日本とカナダで実施した比較文化実験の結果をご報告しました。実験からは、集団間関係が競争的な状況では、カナダ人が日本人以上に内集団に対して協力的に（集団主義的に）なることが明らかになりました。さらに、この文化差の近接因として、「集団間競争の勝者が得る利益を、カナダ人は日本人よりも大きく見積もりやすい」という心理傾向の差異があるとの仮説を立て、これを支持する結果も得ることができました。文化差を生み出す鍵となっているはずの要因（すなわち、勝者が得る利益の見積もり）を統制した条件を設けた結果、この条件では文化差が消失したのです。



学生時代から北米の集団主義の研究を続けておりますが、その基本的モチベーションは「個人主義者の社会性を示す」ことにあります。数々の研究が北米人の個人主義性を示してきました。それでは、そうした心理傾向を持つ北米人はいかにして「社会」を築いているのか。どのようにして集団を築き、維持し、助け合うことを可能にしているのか。比較文化研究を通じてこうした問いに取り組むことで、日本における「社会の築き方」と、それとは異なる「社会の築き方」を浮き彫りにしていくことができるのでは、と考えております。

大学院の頃から、研究は一人で進められないことを叩き込まれてきました。本研究を進めるにあたって、北海道大学やブリティッシュ・コロンビア大学の多くの方々に助けいただきました。また、数えきれない方々からコメントを頂きました。さらに、当日のセッションでは、他の発表者の方々が素晴らしいご発表をされ、私のなげなしの「負けん気」を高めてくださいました。ここに、心からの感謝を捧げます。

◇ポスター発表部門

橋本 剛明 （東京大学大学院人文社会系研究科）

このたびは、このような名誉ある賞を授けていただき、とても光栄に感じております。

本研究は、「集団による謝罪」が個人の寛容的態度を促進しにくいという先行研究の知見を受けて、その原因を明確化するという目的のもとで行なわれました。我々が着目した側面は、集団や組織などの集合体レベルの侵害状況では、対人レベルの侵害に比べて、個人がみずからの手で不公正を是正できるという認知が生じにくいという点です。特に不公正に対するコントロールや勢力の感覚は、寛容性と関連するという議論を踏まえ、そのような勢力感の低さが集団への許しを調整する可能性を検討しました。今回の発表では、企業不祥事を題材に行った実験の結果を報告し、企業に対する影響力を持っていると教示された個人においては、企業謝罪が寛容的反応を促進する傾向がみられるという点を議論いたしました。



おかげさまで、発表ポスターには多くの方に足を運んでいただき、とても密な議論を行うことが叶いました。改めまして、貴重なご指摘の数々をくださった先生方に御礼を申し上げます。本賞の審査にあられた先生方を含め、多くの研究者の方々に、自身の研究に関心を持っていただき、問題意識を共有することができたと（僭越ながら）しみじみ感じておりますが、それは一人前の研究者を志す身にある私にとっては何物にも代え難い喜びであります。と同時に、これは学会発表のたびに感じますが、皆様に頂戴した貴重なご意見をもとにさらに精進せねばと、身の引き締まる思いです。特に、本研究の応用的価値を高める上でも、よりマクロで構造的な観点からの議論に耐えられるよう勉強と検討を重ねる必要があると強く感じております。

最後になりますが、日頃より常に温かくご指導いただいている唐沢かおり先生、ならびに励ましてくれる研究室の仲間、および公私を問わずソーシャル・サポートをくださる多くの方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

★★ グルダイ学会大会体験記 ★★

第 58 回大会体験記

平川 真（広島大学）

9月22日と23日に、日本グループ・ダイナミクス学会第59回大会が京都大学で開催された。私は今回初めてグルダイ大会に参加、発表をした。今年度は、昨年度よりも発表件数が増えたという。その理由についてTwitter上では、「そうだ 京都、いこう」効果と、昨年の大会体験記の内容が良かった

からという、体験記効果が挙がっていたことを覚えている。が、やはり大きいのは学生会員の発表費用が無料になったことだろう。私はこれで参加を決めました。本当に、ありがたいです。

時系列にそって覚えていることを書きたいと思う。22日は、東広島の西条から京都への移動ではじまった。京都駅から会場までのバスは混んでおり、移動で割と疲れてしまった。初日は、哲学者を交えた2つのワークショップ、「社会心理学に絡みつく「甘い誘惑」について考える」と「実験哲学への招待」に参加した。ちょうど夏休みに科学哲学についての読書会をしており、非常にタイムリーであった。「心理学者はある議論については実在論の立場から主張をし、また別の議論については反実在論の立場から主張する」という指摘や、「心のメカニズム・因果プロセスの解明といった目的を掲げたときに、観察不可能な理論対象の実在性をどのように保証するか」といった指摘があった（と記憶している）。また、「心理学の目的に関して、真理への到達を目指す心理学、予測に役立つことを目指す心理学、人文知としての心理学（このあたりの理解がまだ曖昧です...）がある」という話がでた。自分の研究がどのような目的をもつ研究なのかを明確に意識し、適切な研究アプローチを決めなければならないと改めて痛感した。

夜は、懇親会に参加した。私は懇親会のような見知らぬ人が多くいる場が苦手で、たいがい1人で食事をしているのだが、多くの方とお話することができ、とても楽しく過ごすことができた。その後も飲み会に誘っていただき、引き続き楽しいお酒を飲んだ。

23日の朝は雨が降っていたが、会場を後にするころにはやんでいた。置き忘れたビニール傘は、誰かの役に立っているだろうか。最初のセッションはロング・スピーチを聞き、ポスター発表をした。今回の発表では多くの人と議論することができ、様々な視点から意見をもらうことができた。発表を聴きに来てくださった皆様、ありがとうございました。特別講演「社会心理学の過去と未来」では、具体的なマクロ要因から個人の心理、行動傾向を解明する研究アプローチの説明と、それに基づいた研究成果の報告があり、とても刺激的であった。初日のワークショップとあわせて、「社会心理学とは」という大きな問いについて考えるきっかけをもらえた。自身の個別研究に集中し、視野が狭くなっていたので、今回の学会参加は非常に得るものが大きかったと実感している。全セッションが終わり、大混雑のバスで駅まで向かった。知り合いを乗せたタクシーが颯爽と追い抜いていったのは、今となってはいい思い出である。

初めてのグルダイ学会の印象は、人見知りな私でもコミュニケーションがとりやすく、非常に楽しかったという点に尽きる。研究発表の場でも、和やかで活発な議論がかわされていたように思う。今回は、主にワークショップに参加していたので、個別の研究発表を聴く機会が少なかった。魅力的な発表がたくさんあっただけに、残念である。心残りの点はあるものの、たいへん面白く有意義な2日間を過ごすことができた。大会の開催、運営に携わっておられた多くの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

以上は、私の限られた体験に基づくものですが、この体験記を読まれた方が、来年のグルダイ大会に参加してみようと少しでも思ってくれたら、たいへん光栄です（少なくとも、参加者を減らす原因にならないことを願っています）。

★★ 東日本大震災に関する会員の報告 ★★

ビッグデータから見た東日本大震災

三浦麻子（関西学院大学）

東日本大震災発生からまもなく2年が経とうとしている。地震と津波によって破壊された地域コミュニティの再生にせよ、むしろ深刻さを増しつつあるようにも思われる原発事故による放射能災害への対応にせよ、復興への道は未だ遠しと言わざるを得ない。一方で、震災と人間の心理や行動の関連を検証する心理学的研究は既に多く着手され始めており、私もそれに取り組む研究者の一人である。本稿では、被災地にいない被災地に入らない研究者による東日本大震災に関連する研究の一例として、ビッグデータを用いた研究について紹介する。

ビッグデータとは、その名の通り莫大な量の、かつ構造化されていないデータのことである。現代社会では、われわれの行動の多くは、ソーシャルメディアへの投稿や検索サイトで入力するキーワードなど自発的に「提供」しているものから、街中に多数設置されている監視カメラに「捕捉」されているものに至るまで、好むと好まざるとに関わらず記録されている。これらが典型的なビッグデータである。例えば、先日の米大統領選においては[オバマ陣営が投票行動の予測にビッグデータを活用していた](#)ことが報じられている。現実場面での行動がそのまま記録されているものだから、統制された環境での実験や、質問紙調査によって得られたデータよりもよほど直接的ではある。とてつもない量のデータが収集できる観察法、とでも言えようか。

私が東日本大震災についてビッグデータを通してアプローチしようと考えたのには、震災の発生をツイッターのタイムラインで知ったこと、その後もマスメディアの報道と同等あるいはそれ以上にツイートを介して関連情報を知り、またそこで多くの人々の震災に際する情動に接したことが深く関連している。この頃ツイッターに投稿された発言の多くは情報転送を意図するリツイートであり、それ以外の手段も含めて多くの人々は自らのもつ情報をなるべく多くの他者と共有しようと必死だった。私もその一人であり、[社会心理学会の震災復興支援サイト](#)立ち上げもここでのやりとりがきっかけで始まった（経緯は『心理学ワールド』第57号に「[社会心理学者かく闘えり](#)」と題した拙文を掲載していただいた）が、同時にデータ収集の場としても「最適」だと考えていた。大震災に際して、現代社会において欠かせない情報チャネルとなっているオンラインメディアがどのように使われたのかを知ることは、大災害に際する人間の情報行動の特徴や、心理的な対処プロセスを解明することにつながるはずだ、と。そのために、震災直後から長期間にわたって、どのようなツイートがオンライン上に発信されているのか、できる限り大量のツイートを収集しようと試みた。

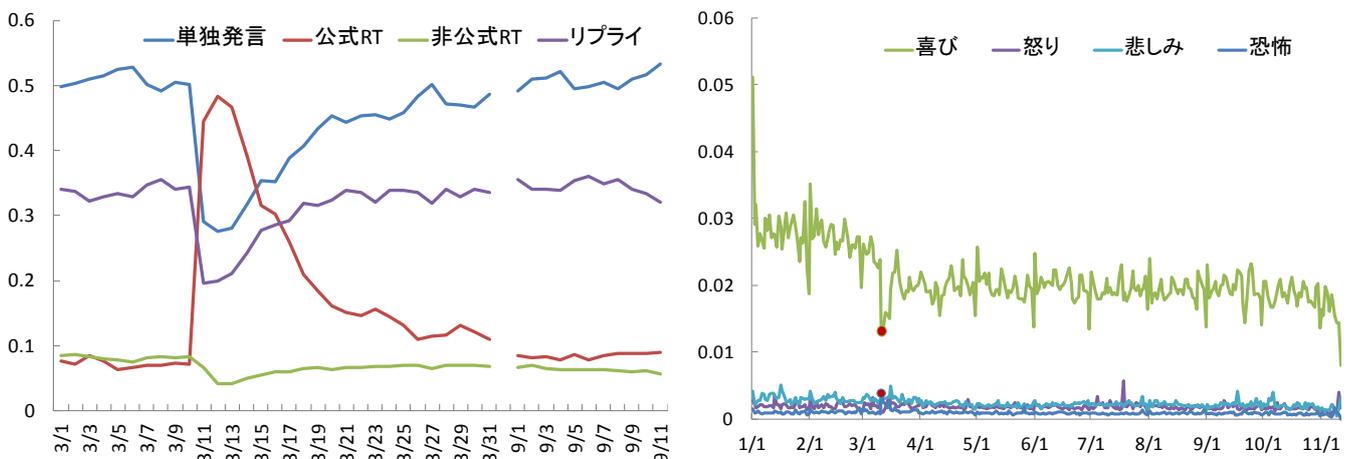


Fig. 1 ツイートのタイプ (左) と感情表出 (右) の時系列変化 (小森・松村・三浦, 未発表)

ここで紹介するのは、こうしたデータに基づく、[小森政嗣](#)さん（大阪電気通信大学）と[松村真宏](#)さん（大阪大学）との共同研究の成果の一部である。分析対象としているビッグデータは、日本国内に居住しており、なおかつ震災発生直後の2日間に「地震」を含むツイートをしたツイッター利用者11,570名による震災前（2011年1月1日）から震災8ヶ月後（同11月11日）までのツイート48,635,394件で、これらのデータから描き出されたツイッター上のコミュニケーション行動の変化のようすをFig. 1に示す（ツイッターにおけるコミュニケーションの仕組みをよくご存じない方は、『ぐるだニュース』[第37号](#)と[第38号](#)の拙解説記事をご覧ください）。左が全ツイートに占める各発言タイプの比率を2011年の3月と同9月前半で比較したもので、震災発生直後1週間程度に他者のツイートをそのまま転送する公式RTが急増しているが、その傾向はほどなく解消し、震災前とほぼ同様の状態に復していることが分かる。一方、右はツイートに含まれる感情関連語（喜び・怒り・悲しみ・恐怖）の出現比率を2011年1月から11月までのデータによって示したもの（図中赤点が3月11日）で、特に顕著な傾向を示しているのは喜び感情である。震災直後に急減した喜び感情は、その後は日ごとの変動はあるものの震災以前のレベルを回復しないままであることが分かる。

また、昨年9月から10月にかけて実施された[東日本大震災ビッグデータワークショップ Project311](#)にも参加して、震災直後の1週間に投稿された日本語による全ツイートを対象とする分析にも着手している。たった1週間の記録だが、総量は30GBにも及び、数個のファイルに分割されてはいたが、もちろんExcelはおろかテキストエディタでも開くことができないサイズである。ワークショップ報告会では、発信位置情報（ジオタグ）の付されたツイート20万件余（データ全体のわずか0.15%でしかない）のみに絞って感情語の出現頻度をカウントし、被災地からの距離に応じた4群に分類して集計した結果を示した（詳細は[研究プロジェクトのWebサイト](#)をご参照いただきたい）。なんと大ざっぱな、と思われるだろうが、その処理だけでも数週間を要したというくらいのビッグさなのだとご理解いただきたい。データ利用期限は報告会の3ヶ月後の今年1月28日で、本稿執筆時点で残された時間はあと1ヶ月。隆車に向かって斧を振りかざす蟻螂の気分で、現在奮闘中である。

以上、甚だざっくりとしたものではあるが、東日本大震災に際する人間行動をビッグデータ分析から解明しようとする試みについて紹介した。本件に関する詳細については、来る3月30日（土）に神戸学院大学ポートアイランドキャンパスで開催されるKSP（関西社会心理学研究会）400回記念シンポジウム「社会を測る」にて、「コミュニケーションを測定する：ビッグデータへの（無謀な）挑戦」として、話題提供をさせていただく予定である（当該シンポには唐沢かおり先生と中谷内一也先生も登壇される）。木下富雄先生曰く、このシンポは「集団や社会レベルの測定法の開発」に向けた新たなチャレンジに関して議論を闘わせる場であるとのこと。その趣旨に叶うべくその時点での「ありっただけ」を投入する所存なので、是非多くの方々からコメントをいただければ幸いである。

★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★

☆研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などございませんので、皆様奮って申請してください。

☆実験社会心理学研究 掲載予定論文 (2012/12/26 現在)

◆2012 年度 52 巻 2 号 (2 月中 発送予定)

原著論文

浅井千秋

組織特性、リーダーシップ行動および就業態度が自発的職務改善に与える影響

神原 歩・遠藤由美

合意性推測の高さが脅威に晒された自己肯定感を修復する効果

早瀬 良・坂田桐子・高口 央

患者満足度を規定する要因の検討—医療従事者の職種間協力に着目して—

資料論文

神原 歩・遠藤由美

高合意性情報が強制承諾実験における態度変化に与える効果：自己肯定感の維持という観点からの検討

野呂千鶴子

市町村合併に伴う保健師の活動システムの追跡

中村和彦

大学1年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果—体験から学ぶ力の影響—

◆2013 年度 53 巻 1 号 (8 月中 発送予定)

原著論文

油尾聡子・吉田俊和

社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供

資料論文

白岩祐子・唐沢かおり

被害者参加人の発言および被害者参加制度への態度が量刑判断に与える影響

石盛 真徳・岡本 卓也・加藤 潤三

コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発

吉田琢哉・中津川智美

対人葛藤対処方略の選択に対する関係目標の影響—接近—回避の軸に基づく検討—

田原直美・三沢 良・山口裕幸・荒 宏視・矢野和男

チーム・コミュニケーションとチームワークとの関連に関する検討

展望

縄田健悟

集団間紛争の発生と激化に関する社会心理学的研究の概観と展望

◆掲載巻号未定分

資料論文

矢崎裕美子・斎藤和志

就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす効果

山中咲耶・吉田俊和

評価者の面前におけるパフォーマンスの抑制メカニズムー認知的側面と感情体験に着目してー

☆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミクスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1-2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。

URLは、http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

★★ 広報担当からのお知らせ ★★

◆ JGDA_Flash

グルダイでは【日本グループ・ダイナミクス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約600名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下のWEBで閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受け付けています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、以下のWEBで閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局（担当：中山・糸魚川）
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社 学会部内
TEL:075-415-3661 FAX:075-415-3662
E-mail:jgda@nacoss.com
URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1
福岡大学人文学部文化学科 池田浩 研究室
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局（担当：田中裕史）
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷(株)内
電話：075-441-3155 FAX：075-417-2050
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp
URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

【編集委員長】

沼崎 誠
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
首都大学東京 人文科学研究科
E-mail : numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など】

広島大学大学院総合科学研究科 坂田桐子研究室

〒730-8521 東広島市鏡山 1-7-1

TEL: 082-424-6577

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

<編集後記> 何とか第 42 号を発行することができました。第 40 号を編集していた頃、「もう 2012 年……」と思っていたら、気がつけば 2013 年に突入していました。月日の経つのが年々早くなって怖いぐらいです。(編集子)